String Fiction Series

12

カルテット

YAMANAKA TOMOTAKA
山中與隆
Duo-Yamanka

カルテット

山中與隆

目次

カルテット　1
編者あとがき　67

カルテット

山中與隆

これは、僕がアマチュアのストリング・カルテットを立ち上げるまでの話である。

僕はアマチュアオーケストラでヴィオラのパート

リーダーをしている。同じメンバーで継続的に練習を続けるカルテットをやってみたいと思うようになった僕は密かに、オーケストラの中からメンバーを誰にするか物色していた。

僕が考えたヴァイオリンの候補者は三人いる。その中から二人を選ぶことになる。ただし声をかける順番は非常に慎重でなくてはならない。先に声をかけた人が引き受けるといったら、後でしまったと思

っても、別の人物と入れ替えるのは非常にむつかしい。

三人のヴァイオリン候補は、腕前の点ではまずコンサートマスターをしているＦ氏が一番だ。彼なら文句なくファーストヴァイオリンを任せられる。

二人目はＦ氏の隣で弾いている若い独身女性Ｙさんである。なかなかの美人で彼女に近づきたがっている男は多い。腕前はまあまあで、練習すればカル

テットのファーストヴァイオリンもなんとか勤まるだろう。三人目の候補は、オーケストラのセカンドヴァイオリンのパートリーダーをしている女性のＳさんである。小学生の子供がいる主婦だが、子供のころからヴァイオリンを習って、ずっと弾いているというから結構なれた感じである。しかし、日ごろ忙しくてあまりたくさん練習できないのか、バリバリとなんでも弾くといった風ではない。それに主婦

としてオーケストラの練習以外に参加する時間が取れるのか気にかかる。

僕はこの三人の誰と誰に声を掛けるか迷った。オーケストラの練習のたびに、三人をかわるがわる観察した。もちろん声をかけても受けてもらえるかどうかはわからないが、とにかく優先順位を決めなくてはならない。

僕は自分が大将にならなくても、Ｆ氏にリーダー

になってもらえばいいではないかとも考える。やはり弾けなくては始まらない。

主婦のSさんは優しそうだ。練習時間さえとってもらえるなら、一番気持ちよく出来そうな気がする。しかし若くて美しいYさんも捨てがたい。もし喜んで参加してくれるようなら嬉しいではないか。僕は、若い彼女に室内楽の何たるかを教えながら練習する姿を思い浮かべるのだった。

僕がいつまでも堂々巡りしながら迷っている間に、思わぬ展開があった。

地元の公民館から、クリスマスコンサートで、室内楽をやってくれないかという依頼がオーケストラに来たのである。そのコンサートまでにあまり間がなかったので、役員会で現在の各パートのトップでカルテットを組んで出てもらおうということになった。メンバーは各パートのトップであるから、コン

サートマスターのＦ氏、主婦のＳさん、ヴィオラの僕それにチェロのトップをしているＣ氏である。Ｃ氏は、もう定年退職している人だが、いまもレッスンを受けながらがんばっているベテランである。カルテットを作りたいと思っている僕にとっては、降って沸いたようなチャンスである。ただひとつ、今度のクリスマスコンサートはオーケストラに依頼されたスポットの演奏だからそれでいいのだが、僕は

チェロのC氏には引っかかるものがある。
C氏の何処が気に入らないかというと、彼の性格である。僕から見ると、C氏は柔軟性のかけらもない性格で、一度自分の意見をいい出すと絶対に引き下がらない。オーケストラの練習でもしばしば、彼のしつこい発言で練習が中断される。練習指揮者も彼の発言にはしばしば困っている。カルテットでもそれをされたらかなわないと僕は思う。しかもC氏

は、音楽暦がながく、なんでもよく知っている。だからカルテットでも彼のペースになってしまいそうなのである。

日曜日の午前中、その臨時のカルテットの初練習があった。

約束の九時半、全員がオーケストラ練習場になっている文化センターのリハーサル室に集合した。オ

ーケストラから公認された、いわば選ばれた四人である。そのちょっとした誇りがみなの顔に表れている。表情は明るく、挨拶の声も軽やかである。

この日は、まずメンバーに一任された曲選びから始まる。依頼されたクリスマスコンサートでこのカルテットに割り当てられた時間は約三十分。ちょうど弦楽四重奏曲一曲でそれくらいの長さのものが多い。

しかし、この三十分の使い方から意見が分かれた。C氏はちょうどいいからよく知られた弦楽四重奏曲を一曲やろうという。これに対してF氏は、今回の聴衆はクラシックに興味がある人たちばかりとは限らないので、クリスマスに関係のある曲や、日本の歌、アニメ主題歌などの編曲ものをしよう、といって自分の持っているそういった曲の楽譜を示した。Sさんと僕は特に提案をしなかった。

「弦楽四重奏曲を一曲するとしたら、例えば何を考えています？」
僕がC氏に聞いた。
「そりゃぁ、なんでも考えられるが、一般に聞きやすくて、短期間の練習で弾けそうなのは、《アメリカ》か《ひばり》じゃないかね」
そういいながら、C氏は大きな鞄からそれらの演奏用の楽譜を取り出した。こちらも準備万端である。

「もちろんやりたいのは、そういうちゃんとした曲なのは、当たり前だけど、今回はオーケストラに依頼された仕事で、われわれの楽しみのための演奏ではないのだからね。聴きに来た人のための選曲をすべきだと思うんですよ」

とF氏。いかにも自分には楽団のコンサートマスターとしての責任があるといわんばかりの口調である。

「聴きに来る人のことを考えるのだったら、むしろ

そんなわけのわからない編曲ものより、大作曲家がカルテットのために精魂込めて書き上げた音楽こそふさわしいでしょう」

C氏の反論の仕方には棘がある。僕はこの議論に解決の糸口を与えたいと思って発言した。

「確かに今回の場合は、聞き手のことを考えた方がいいと僕も思います。たしか依頼の趣旨にも『親しみやすくて楽しいものを・・・』とありましたからね。

それで、僕たちのようなものがやっても、聞いて楽しいというのはどっちかということですよね。われわれが演奏意欲を持って練習できるのはどちらかということも考えるべきだし」

僕自身も、どちらかというとC氏の意見に賛成なのだが、断定的にそちらに組するにはやや躊躇がある。

「そうでしょう。プロの名演奏家でないわれが本格的な曲をやったとしても、お客さんが感動するよう

な演奏にはならないでしょう」
F氏の語調はややエキサイトしてきた。
「だから、せめて曲だけでも内容のあるいいものを演奏しないと、退屈させるだけですよ。曲の力にも手伝ってもらうということですよ」
「私がいっている曲は、たしかにクラシックの名曲ではないけれど、昔から世界中の、まあ日本中かもしれないが、それこそ限られたクラシック愛好家な

んかよりはるかにたくさんの人たちが心から親しんできた曲ですよ」

「編曲のことをいってるんですよ。クリスマスソングでも日本の歌でも、原曲の良さは、わたしも知ってますよ。でも適当な編曲で弦楽四重奏にしたものは原曲のよさが失われていることだってよくあるじゃないですか」

「Cさんは、私が持ってきた編曲を知っていってい

るんですか？」
「いや。でもその手のものでまともなのは聞いたことがないからね」
それまで黙って聞いていたＳさんが口を開いた。
「昼までに二時間ちょっとあるから、Ｆさんと Ｃさんが持ってきた曲を、ちょっと弾いてみませんか？
Ａさんは何か用意してきたものがあるんですか？」
Ａさんとは私のことである。

「モーツァルトとか、ちょっと持ってきましたが、私は、お二人のいわれたどちらかでいいと思いますから。Ｓさんは何か？」

「わたしは、はじめから皆さんにお任せのつもりでしたから・・・」

このＳさんの発言を、僕は物足りなく思った。やはり、継続的なカルテットのファーストヴァイオリンとしては、こういう姿勢では困ると感じたのである。

しかし、いまは、Ｓさんのとりなしどおりに、俎上に上がった曲を音にしてみることになった。Ｆ氏とＣ氏の持ってきた楽譜が四人に配られた。

「じゃぁ、《アメリカ》も《ひばり》もみんなよく知っているし、どこかでやったこともあると思うから、Ｆさんの提案曲からしましょうか」

Ｃ氏がそういうと、

「みんなが知っているというのなら、私の提案する

曲も、もっと知っているといえますよ。でもそれはそれとして、こちらからでいいですよ。ではジングルベルなどのクリスマスの曲からね」

F氏の言葉で決まった。巷に膾炙した音楽が、街で流れているのよりもずっと地味な調子で流れ出した。クリスマスソングが五曲メドレーになったものを弾き終えた。

「案外難しいところがあるなぁ」

C氏がその部分を弾きなおしている。僕も細かい音符の連なるところを弾いてみる。F氏はさすがに提案者で、自分が所蔵する楽譜であるだけに全体を無難に弾いたようだ。

「次にいきましょうよ」

Sさんの発言で、一同はアニメ主題歌を三曲弾いた。Sさんは小さい子供がいる母親だけに、三曲ともよく知っているようだ。しかし、僕とC氏は、アニメ

映画の題名を聞いたことがあるだけで曲はぜんぜん知らなかった。メロディに聞き覚えさえなかった。それだけでなくC氏は、

「この種の音楽は作り物のメロディがもっともらしく化粧されて出てくるだけで、何の面白味もないね」とつぶやいた。それはF氏の耳にも入ったと思うが、彼は聞こえなかったように、

「日本の歌もやってみましょう」

と促した。日本の歌は冬に関係したものが三曲あった。《冬景色》を弾きながらC氏は、

「やたらに凝った編曲だね」

とまたつぶやく。F氏は内心カチンときているが、我慢して平静を装って弾き続ける。そのあと急に小さな音で弾くように指定されているところで、C氏が大きな音で飛び出した。

「ピアノで！」

F氏が叫んだ。その声には、堪えていたもやもやがこもっていた。C氏は慌てて、

「失礼」

と言いながら音を弱めた。初見とはいえ、こんなシンプルな譜面で指示を見逃すのは、『演奏するときはいつも集中しなくては駄目だ』とみんなにいっているC氏にしては、不注意である。

ひととおりF氏提案の曲を弾き終えると、C氏提

案の曲を試演する番である。みんなは黙ったままC氏が配った楽譜を開いた。

「《ひばり》からやりましょう」

とC氏。C氏はこれからが本番という風に姿勢を正した。Sさんと僕がスタッカートで刻む三度の和音が始まった瞬間から、四人の心に音楽が流れ込み始める。F氏は余裕を持って弾ききったが、他の三人はそれぞれ難しいところを間違えたり、音が抜けた

りしながら、またアンサンブルの難しいところは合わないままだったりしたが、一応最後までいった。弾き終えると誰からともなく、

「やっぱりいい曲だね」

といった感じの声ともため息ともつかない感想が、その場を包んだ。それを察したC氏が、

「《アメリカ》の方はやらなくてもわかるでしょう・・・で、弾いてみてどう思いますか？」

と、勝算ありげにみんなに問いかけた。
「曲はすごくいいんだけど・・・《アメリカ》でも同じだと思いますけど・・・弾くんだったらこっちの方が面白いのも確かですけど・・・クラシックファンでない人にとっても面白いですかね」
Sさんが歯切れ悪く、半分独り言のようにいった。
「それは、弾く前からわかってたことでしょ。はじめから問題は聴きに来た人にとってどうかというこ

となんだから」

Ｆ氏が、試演する前の持論を繰り返そうとしている。しかし今度は、もっとも難しいパートにもかかわらず四人の中でただひとり、さらりと弾いて見せたＦ氏の言葉には、一段と重みがある。Ｆ氏が、自分がやりたいかどうかで意見をいっているのではないことを、みんなは実感させられたからである。Ｃ氏もじっと譜面に目を落としたままで考え込んでいる。

それからゆっくりと、はじめに弾いたＦ氏提案の曲の譜面のページを繰り始めた。みんなはＣ氏の次の言葉を待った。

「んーん・・・折角こんないいメンバーでするのに、ちゃんとした曲をしないなんてもったいないんだよなぁ」

Ｃ氏も一方的に自分の主張を繰り返すトーンが少し変化してきたようだ。

「じゃ、こういうのはどうだろう。クリスマスソングとアニメ主題歌をやって、そのなかに《ひばり》か《アメリカ》から一つか二つの楽章をいれるというのは・・・・」

F氏は折衷案を出した。C氏の態度が軟化したのを見て、F氏の気持ちも軟化したようだ。

「それいいですね。お客さんにも、聞きなれた曲だけでなく、本来の弦楽四重奏曲というもののよさも

体験してもらえるし」
とC氏も賛成した。Sさんは、硬直した議論から抜け出してホッとしているようだ。みんなが百パーセント満足した結論というわけではなかったが、この妥協案に落ち着いた。
まだ弾いてなかった《アメリカ》も弾いてみることになった。《ひばり》と《アメリカ》のどちらかの第一楽章をプログラムに入れることにしたからで

ある。

一回目は通すだけだったので、合わないところも随所にあったが、誰も何もいわなかった。しかし、少し詳しくやっていこうといって始めた二回目は、一小節目からC氏のダメが入った。F氏から始まってSさんが加わり、それにC氏が入って僕が主題を弾き始めるのを待つところだ。C氏はF氏とSさんのところがはっきりしないから、自分が入れないと

いう。
「わたしが、うまいことFさんのテンポに乗らなかったから」
と、Sさん。彼女はいつも謙虚だ。もう一度やり直したが、やはりC氏は、
「それじゃ入れない」
といって、やり直しとなる。何十回やり直しただろうかと思うほど、その冒頭の一小節を繰り返すが、

チェロのC氏の入りが決まらない。はじめのうちは確かにセカンドヴァイオリンのSさんのノリがいまいちであった。ファーストヴァイオリンのF氏が拍の途中から弾き始めるのを、僅か二拍分聞いただけでテンポを正確に掴んで、自分も拍の途中から入るのは、アンサンブルの難しいところである。しかし繰り返すうちにSさんはとても上手く入ってくるようになった、と僕は思った。にもかかわらずC氏に

よるチェロの入りはぴったりとこない。有名なヴィオラの主題を弾くために待っている僕から見ると、C氏が、前の二人のテンポを掴みきれないで、どちらかというと遅れ気味に入ってくるためにぴったりこないように聞こえる。とにかくC氏は前の二人のヴァイオリンがぴったりとアンサンブルしないから、自分が入れないといってやり直しを求め続けている。僕が業を煮やしてかまわず主題を弾きはじめても、

「待って。ここは冒頭の一番大事なところだからきちんとやっておこう」
といってやり直しを求めた。F氏が、
「じゃぁ、ここは課題ということで先に進みませんか」
といって、C氏の同意を求めたのでやっとC氏は、先に進むことを了承した。しかし、
「こういうところをきちんとやっておかないと、あ

とからなんて時間が無くなって、絶対にやらないんだよな。結局は甘い演奏になってしまう・・・」とまだブツブツいっている。みんなはそれを無視して、曲を進めた。C氏はやや渋い顔をして弾いていたが、しばらくは黙っていた。しかし、中間でSさんが勢いよく弾き始めてからすぐに音を弱めて、細かい音符でF氏の伴奏に回るところで、C氏の『ダメ』が入った。

「そこんところ、セカンドはもっともっと急に小さな音にして・・・そうすることでセカンドヴァイオリンがすごく魅力的に聞こえるところなんだから」とSさんに注文をつけた。Sさんは苦笑しながら、「ここ、難しくてうまく弾けないんですよね」といいながら、一人でその部分を弾いてみる。確かにSさんにとっては難しいようで、細かい動きのところでは二度に一度は指がもつれる。C氏が乗り出

すようにして、Ｓさんが弾くのを睨んでいる。そこのところでまた前に進まなくなるのを予感して僕は、「では、みんなでそこんとこからやりましょうか」と声をかける。Ｓさんはあまり上手く出来なかったがＣ氏の『待った』はかからなかった。そんな調子で、初顔合わせの練習にもかかわらず、自分以外の誰かに注文するＣ氏のおかげで、《アメリカ》の練習だけで、予定時間のほとんどを使ってしまった。

「まあ、まだ一か月あるから、何とかなるでしょう」
F氏が慰めるようにいった。
C氏の再三にわたる注文は、的外れとはいえないにしても、意地悪く考えると、自分が上手く弾けなかったところで止めて、ほかのものにいちゃもんをつけるといった感じは否めない。ほかのものにもいいたいことはあるのだが、C氏の注文で時間をとられているので、つい遠慮してしまっている。特にF

氏などは、誰よりも上手く弾いていて、他の三人の音にも十分注意を行き届かせているから、ずいぶん注文したいことはあるはずだが、控えているようなのである。この曲はヴィオラの目立つところが多いだけに、僕にもかなりC氏の注文が飛んできたが、僕は、そのことよりも、いま自分が考えている継続的なカルテットのメンバーとして、このメンバーからどうやってC氏だけを外して、ほかのチェリスト

にするかで、頭が一杯であった。

僕の目論見としては、オーケストラにはEさんという大学を出たばかりの快活な女性のチェリストがいる。彼女ならC氏のような癌とはならない。

彼女は大学でトップをしていたというから技術的には大丈夫だと思う。仮にカルテットの経験はなくても僕やF氏の薫陶を受けて、いいカルテットのチェリストになるはずだ。

僕の頭の中には、Ｆ氏とＳさんとＥさん、それに僕という四人によるカルテットの構想が固まってきた。そのまえにどうやって・・・

ところが僕は、話を一層面倒にする状況を自ら招くことになる。

それは、クリスマスコンサートまであとわずかというころ、オーケストラの練習が終わって帰るみち

すがら、僕はチェロのEさんと、たまたま駐車場まで一緒に歩く場面があったのだが、そのときEさんが、

「カルテットの方はうまくいっていますか」

と話しかけてきた。Eさんにしてみれば、特に親しいわけではない僕とは話題も無く、そのことを思いついて場をつないだだけだったのだろう。ところが僕は、こともあろうにまるで誘導尋問を受けたよう

に、

「やっぱり、カルテットは面白いですよ。実は僕、いま継続的にいろいろな曲を練習するカルテットを作りたいと思っているのですよ。そのチームのチェロにEさん入ってほしいと思っているのだけど、一緒にする気はありませんか？」

といってしまったのだ。

「うわ、面白そうですね。でも私なんかでいいので

すか。ヴァイオリンはどなたなんですか？」
「FさんとSさんです」
「じゃぁ、いまされているメンバーですね。Cさんはされないのですか？」
「いや、まだわたしの計画はみんなにはなしてないので」
「わたしはYさんが一緒だとうれしいけど、ヴァイオリンはもう決まってるんですよね」

「まだ決まったわけではないから、入ってくれるのだったらYさん、わたしも歓迎ですよ」
Yさんこそは、例のファーストヴァイオリンのF氏の隣で弾いている若い美人のことである。
僕がこれまで練ってきた腹案はどこかに消えて、Eさんとの話の中で別の案が浮上していた。それは、Yさん、Eさん、僕、それにもう一人誰かヴァイオリンという形である。

これは、このオーケストラの中の人材で考えられる最高のカルテットを作るというのとはまったく違うものであった。

しかし、この新しい話は予想以上に早い展開を見せた。Eさんが、思っても見ないほど乗り気だったのだ。話はまずEさんからYさんに伝わり、二人は共通の友達であるUさんという若い女性に広がった。Uさんは、これもかわいらしい女性だが、比較的ヴ

ァイオリンの経験は浅く、オーケストラでも後ろの方で弾いている。僕は自分抜きで話が広がることに困ってしまった。Ｅさんのペースで進んでしまったメンバーは、オーケストラの綺麗どころを集めたような華やかな形になったが、カルテットを地道に練習するチームとしては、問題がある。Ｅさんが、こんなに軽はずみな人物だということも意外であった。それだけでなくＥさんは、

「いつ始めますか」
と催促さえするのだ。勝手に転がりだした車を、僕には止める術も無かった。
結局クリスマスコンサートも終わらないある休日に、このEさんペースでメンバーが決まってしまったカルテットは初めての練習会を持った。
いざ集まってみると、経験の浅いUさんはいうにおよばず、オーケストラでは結構弾いていたと思っ

ていたYさんやEさんも、カルテットの経験はまったくなく、僕という先生の周りに集まった幼稚園の生徒のような感じであった。《アメリカ》とか《ひばり》といっても、どんな曲でしたっけという風で、僕が《アメリカ》の冒頭のヴィオラのテーマを弾いてみせると、

「聞いたことがあるわ」

といった感じなのである。僕は、弦楽器を嗜み、オ

ーケストラで活動している若い美人に囲まれているというような幸せ感はまったく消えうせて、ただ困ったことにはまり込んでしまったという気持ちに閉ざされるのであった。しかし、みんなは僕の思いとは違って、予想以上にまじめで本気であった。

クリスマスコンサートはいちおう無事修了した。そして、終わった後の控え室で、Ｆ氏から、

「折角だから、このメンバーで継続的にカルテットをやりませんか」
と提案があったのだ。C氏はもちろん、主婦のSさんも二つ返事で賛同した。
F氏からすれば、真っ先に話に乗ってくると思っていた僕の反応が鈍いと思ったことだろう。僕は、成り行きで、本来作りたいのとはかけ離れたメンバーのチームに関わってしまったことで、冷静さを失

っていた。仮にEさんたちとのチームに関わっていても、同時にこのトップメンバーによるチームにも参加するという選択肢もあるはずなのに、不覚にも、「ちょっと僕は、ほかのグループに誘われているから、失礼するよ」

といってしまった。その言葉が自分の口から出ている最中に、僕はすでに後悔していたが、言葉は止まらなかった。

「ほかのグループって？」
F氏が聞いたが、僕は、
「ええ、ちょっと」
というだけだった。若い女性ばかり集めたように思われるのが嫌だったし、Eさんのペースに押しまくられた自分のふがいなさも恥ずかしかった。C氏が、
「そういうことなら仕方がないから、ヴィオラはほかの人を探しましょう」

「室内楽に詳しいAさんが抜けるなんて、残念だわ。その組と両方兼ねられないのですか？」
優しいことをいってくれるのはSさんだ。ところが、C氏が、
「練習日の調整で苦労することになるから、兼ねるのはよくないでしょう。オーケストラの練習もあるし、みんな休日にしか集まれないのだし」
「そっちって、辞められないの？」

Ｓさんはまだ残念がる。僕は何故か、折角のＳさんの誘いに乗れないような気がしている。Ｃ氏の発言が、僕はいなくて丁度いい、といっているように聞こえるからだ。それだけでなく、はじめたばかりのＥさんたちとのチームのメンバーの顔を思い浮かべると、美人ぞろいだからというのではなく、いやそれもあるかもしれないが、チームが出来た以上、自分が指導的な立場で、彼女たちにカルテットの楽し

みを伝えるべきではないかとも思うのであった。それにくらべて、このトップメンバーによるチームは、C氏やF氏がいるので、僕が常に指導的に振舞うことは出来ない。彼らと対等な立場は取れるだろうが、老練なC氏が我が物顔で支配する可能性が非常に高いではないか。僕は、あれこれ考えて、自分を納得させようとした。

オーケストラでは、毎年春のコンサートの後、恒例の団内アンサンブル大会が行われる。いつも管楽器の連中は競うようにしてチームを組んで出てくるが、団員数は結構いるのに弦楽器の参加は少ない。ところが今回は、二チームのカルテットがエントリーした。もちろんヴィオラに、僕の代わりに若いO氏を加えたトップカルテットと僕たちの組である。出し物もトップカルテットは、ベートーヴェンの初

期の弦楽四重奏曲である。難曲である。僕のグループはモーツァルトの初期の易しい、少なくとも譜面づらは易しい曲であった。

先に演奏したのは僕のグループだった。ゆっくり目のテンポで、素朴に譜面を追った演奏だったが、よく練習の跡が見られるものであった。一方トップカルテットは、さすがにＣＤで聞くような颯爽としたテンポで、見るからに手馴れた感じの演奏だった。

しかし、聴いていた団員たちの反応は予想外だった。弾けないところを懸命に練習してきて、本番でも必死で集中しながら合わせようとする僕のグループの演奏が、自分たちの上手さを見せようとしたようなトップカルテットの演奏よりも好印象を与えたらしいのである。トップカルテットの演奏は、随所に適当な部分がのこり、それが聴くものの共感を逸らしてしまい、たださらさらと弾いただけの印象の

薄い演奏になってしまっていたのである。僕たちのカルテットの演奏は、音程もアンサンブルも随所でずれたし、速いフレーズを受け持つメンバーがその途中で弾けなくなってしまったりしながらおしまいまでたどり着くといった、いってみればお粗末な演奏であった。ただ僕は、それらのことははじめから予想できたので、とにかく失敗を気にせずに、思いきって弾き続けることを最優先にして練習を積んで

きたのである。僕のメンバーは若さの大胆さもあって、そのことを本番で実に見事に実行してくれた。

この度のことで僕は考え方が変った。自分たち程度の素人演奏では、少しくらい慣れていても、そうでなくても聴くものの心に残る演奏という点では、たいした差はないのだ。あるのは取り組みの姿勢に尽きるということである。僕は、このグループで続

けていこうと心に決めた。

完

＊この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくＩＴ技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末の Amazon のペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの中身から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っておりましたので、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ（URL:https://www.duoyamanka.com）への投稿の形でも発表していきたいと考えておりま

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1　山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありますが、表示されます。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生れ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れたいと思っています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なものなどジャンルを選びませんが、常にベースには何らかの形で音楽が絡んだものにしたいと考えています。

ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によってその物語にも音楽にも感動してもらえるような作品を完成させたいと思っています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

＝電子書籍＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた
さまよえる視察団
蒸発の衝動
インテルメッツォ
爆発
妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男
オセロー
テンペスト
定年の晩
魂の三重奏
ロシアンルーレット
ささゆり

才能移転
ある三文作家が見たもの
けんか
袖ふれあうも
ミスターフェイト
峠を越えて嫁入りした女
花火見物
ある小学校教師の敗北

三坂峠　二話
第一話《お蓮・勘兵衛　悲恋の墓》
第二話《緑のトンネルで》
阿弥陀山
ゴーシュの華麗なる転身
ある男の臨終
野の寂しさ
四重奏

親も子も老いて
わしゃ、ただの山ザルじゃ
リョウコからの電話
カルテットのある風景
「オセロ」～手紙版
出来る間に、出来るだけ
なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1　弦楽四重奏団　a

2　弦楽四重奏団　b

3　親和力

4 トリオ・ソナタ
5 不協和音
6 解散
7 音楽のある生活
8 ビオラを弾く生活
9 疑問
10 生きがい
11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

＝既刊のペーパーバック＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集２―ある三文作家がみたもの他

短篇集３―ミスターフェイトほか

String Fiction Series 12
カルテット

2022年11月10日初版発行
著者:山中興隆
編集:山中伶子
https://www.ac-illust.com/
・タイトル: 弦楽器グラデーション
作者: t-dunさん
イラストのID: 2610321
・タイトル: 花のフレーム2(黒)
作者: 猫エンジンさん
イラストのID: 1587380
https://www.silhouette-ac.com
・タイトル: 譜面台
素材のID: 105365
・タイトル: 譜面台
素材のID: 105366
https://www.photo-ac.com
・タイトル:チェロ
作者:r**********mさん
写真のID:3669919
©Tomotaka Yamanaka 2022
https://www.duoyamanka.com